

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	2023 年度
氏名	青木 柗平	指導教員 (主査)	笹川 智子准教授

論文題目	スティグマとセルフ・コンパッションが援助要請態度に与える影響 ——過去の援助要請経験の有無に着目して——
------	---

本文概要

【問題と目的】 援助要請行動とは、友人や家族に対してや、専門家に対して、必要な時に他者に助けを求める行動と定義される (Barker, 2007)。近年では、必要な時に他者に援助を求めることが出来ない人々の存在が問題視されている (独立行政法人日本学生支援機構, 2019)。心理的問題を抱える当事者が、専門家への援助要請を拒絶することを予測する要因として、自己スティグマと公的スティグマの存在が挙げられる (Corrigan, 2004)。Ina & Morita (2015) は、心理的問題に苦しんでいたとしても、その当事者が専門的援助を求めることに対するスティグマを持つ場合、援助要請行動が行われなことを示唆している。一方、援助要請態度を促進する要因として、セルフ・コンパッションが注目されている。セルフ・コンパッションが高い者は、自己の弱みを隠ぺいする気持ちが低いいため、友人に援助要請行動を行いやすいことが示されている (宮川・谷口, 2017)。このことから、セルフ・コンパッションはスティグマのネガティブな影響に対して、緩衝効果を持つことが期待される。また、援助要請態度には過去の被援助経験が影響することが明らかになっており、援助要請を研究する上では、回答者の症状や援助要請経験を統制する必要があると指摘されている (水野・石隈, 1999)。しかし、専門家に対する援助要請態度への自己スティグマと公的スティグマ、およびセルフ・コンパッションの影響を検証した先行研究は存在しない。このため、本研究では被援助経験の有無により群分けを行い、回答者の心身症状の影響を統制する形で、これらの変数間の関連性について検討することを目的とした。

【方法】 大学生 280 名 (男性: 89 名, 女性 187 名, その他 4 名, $M=20.34$) を対象にインターネット上で無記名の質問紙調査を実施した。調査材料は、フェイスシート (年齢, 性別, 被援助経験の有無), The 10-item Self-stigma of Seeking Help Scale 日本語版 (Ina & Morita, 2015), The 5-item Stigma Scale for Receiving Psychological Help 日本語版 (Ina & Morita, 2015), The 10-item Attitudes Toward Seeking Professional Psychological Help: A Shortened Form 日本語版 (Ina & Morita, 2015), Self-Compassion Scale 日本語短縮版 (有光他, 2016), University Personality Inventory 短縮版 (鋤柄他, 2019) であった。

【結果と考察】 相関分析の結果、経験あり群・なし群のいずれにおいても、セルフ・コンパッションは援助要請態度と正の相関関係にあることが示された。経験あり群においては、自己スティグマと知覚された公的スティグマが援助要請態度やセルフ・コンパッションと負の相関関係にあることが示された。一方、経験なし群においては、自己スティグマのみが援助要請態度やセルフ・コンパッションと負の相関関係にあることが示された。また、援助要請態度を従属変数、自己スティグマと公的スティグマ、およびセルフ・コンパッションを独立変数とした階層的重回帰分析の結果、経験あり群・なし群のどちらにおいても、二つのスティグマはセルフ・コンパッション投入後も援助要請態度を予測することが示された。このことから、セルフ・コンパッションは援助要請態度を肯定的にするが、そのポジティブな効果よりも、自己スティグマや知覚された公的スティグマが援助要請態度を否定的にする影響の方が大きいことが推測された。そのため、援助要請態度を肯定的にするためには、セルフ・コンパッションに基づくアプローチだけではなく、反ステレオタイプ法 (榎原, 2020) や心理教育等のような二つのスティグマに対する直接的なアプローチも必要となることが推察された。